

田舎を共有する 領域を開く建築



建築家 安部 良

空き家をオープンキッチンに改造した「島キッチン」 ©DAICI ANO

「島キッチン」の中央ステージでは、さまざまなイベントが... ©art setouchi



者に対して田舎をひらき地元感覚を共有すること、領域を開いてネットワークを繋いで行くことが建築の命題になってきているように感じている。

岡山県西粟倉村は、林業を中心とした新しい試みで村の活性化に力を注いでいる。技術や知識をもった若い世代の人達が可能性を求めて入村している。バイオマスエネルギーを取り込み、化石燃料への依存度を減らして行くという試みも始められている。間伐材や薪をボイラーで燃やして熱を作る。薪で火を燃やして暖をとる、かまどでご飯を炊く、薪で風呂を湧かして入る。火を取り込んだ生活には省エネやエコロジーという思想を超えた能動的な楽しさが発見できる。その

二〇一〇年、香川県を中心に、瀬戸内海の島と島を結ぶアートイベント「瀬戸内国際芸術祭」が開催された。「豊島」という島に、観客と参加アーティストと島民を結びつける場を作ってほしい。そしてどんなイベントでもできる劇場にしてほしい。それ以外は全ておまかせします。」芸術祭ディレクターからの要望は難題でシンプルで、そして自由だった。豊島は自然環境に恵まれて、自給自足が出来る島と言われるくらい農水畜産業が盛んだが、戦後最大と言われた産廃不法投棄問題のイメージは島民の心に大きな傷を残したままだった。最初に僕の頭に浮かんだのは「島キッチン」というプロジェクト名だった。豊島のお母さん達が手料理を作る様子こそが、この島の文化を伝えるベストパフォーマンスだと思ったからだ。古い空き家をオープンキッチンに改造して、そこをステージに見立てようと考えた。次に浮かんだのは大きな木陰の様な屋根だった。敷地の中心に残っていた柿の木を拡張しようと考えた。敷地の中心に残っていた柿の木を拡張しようと考えた。有機的な素材で長い年月で大地に戻って行く屋根を作ろうと思った。最初に思いついた素材は銅板だった。銅は豊島のすぐ隣の直島や犬島で大正時代から製錬されていた瀬戸内らしい素材だし加工も簡単だ。そして僕にとつて銅や真鍮は憧れの素材でもあった。イタリアの建築家カルロスカルバは銅や真鍮を木や鉄の中に埋め込んで宝石のようなディテールをつくり出した。僕も、社寺建築や大正時代に流行した擬洋風建築とはぜんぜんちがう、誰も見た事のない銅の使い方をしたかった。小さな薄い銅板を鳥の羽のように重ねて、風ではためくようにしよう。板と板の重なり部分で反射した光が屋根の内側まで優しく入ってきて、新しい環境が出来上がると考えた。設計の途中で銅板を使うほどの予算がないことがわかり、代りに焼き杉板を

使う案に変更した。この地域では屋敷の外壁に使われていて、耐候性もあり安価で手に入りやすい素材であった。これが意外な結果に繋がった。作品が完成して発表されるや否や「このシングルは一体どういう仕組みになっているのか？」と、世界中から沢山の問い合わせが舞い込んできた。屋根や外壁に木板を使った伝統的な建築は世界中にあって、そういう屋根の葺き方を総じて「シングル」と呼ぶ。耐候性のある焼き杉といつても屋根に使っているのだから二三年ごとに交換が必要だ。メンテナンスも兼ねてボランティアの人達と年に一度、屋根をおろして葺き替えをする事にした。この作業が毎年の恒例行事となつている。屋根の葺き替えが終わると炊き出しと餅つきをして振る舞う。作業に参加した人達はここを自分の家と感じて年に何度も帰ってきてくれる。雑誌やインターネットで知った海外の人達が島の御馳走を目指してやってくる。キッチンのお母さん達はまるで親戚達を迎えるように、手作りのおもてなしを楽しんでいる。

島キッチンの反響で年に数回、欧州諸国で講演をする機会に恵まれている。欧州諸国では都市と地方の関係性、高齢化や過疎化による地域集落の存続など日本が抱えている問題が二〇年くらい先行しており、建築や建築家の役割に対して明確なビジョンが求められている。講演後の質疑やディスカッションを通じて、訪問



「島キッチン」柿の木を中心にした大屋根 ©DAICI ANO

魅力には人々の繋がりをつくり、新しい場を発生させる可能性がある。二〇一四年、廃業中だった温泉旅館を村から借り受けバイオマスエネルギーでの再開を準備中の友人たちと、日本で唯一五右衛門風呂をつくる鋳物メーカーとの協同で、入浴や食を切り口に、火を使った生活の楽しさを共有するコミュニティづくりのイベントを企画した。イベントの最中、村役場の人がやつてきて友人達と話し始めた。「建物の改装に国の予算が使えるので建築家を探して下さい」「それならこの人が適任です」「こんな流れで隣にいた僕が村の温泉の改装設計をする事になった。「あわくら温泉元湯」は高齢者介護基盤としての機能をあわせもつとともに、実は小さな子供を育てる世代にも焦点を当てている。キッズコーナーや授乳室を備えたカフェには子育てに追われる主婦達が集い、その様子を楽しみに世話好きな近隣の老人達が集まってくる。地の物をつかったシンプルな料理とかまどで炊いたご飯が自慢の食堂や、旅行者達のゲストハウス機能も備えている。世代を超えたコミュニティが見えやすい場所、訪問者と村民の交流が生まれる場所を作り出そうという計画だ。はつきりとしたビジョンが固まれば僕達はそれらを効果的に繋いで行くようなデザインをするだけだ。そして最後の仕上げにアプローチの正面の窓をキッズコーナーから直接出入りできる引き戸に作り替え、その手前に大きなウッドデッキをつくり、パーゴラ屋根を設置することにした。近隣に開いた大きな縁側を作り出すイメージ、新しい「あわくら温泉元湯」の特徴を一番解りやすく表した場所だ。パーゴラ屋根の下は子供たちの遊び場になったり、移動式五右衛門風呂が設置された露天風呂になったり、鹿やイノシシを調理した炊き出し、野外ライブや地域の交流イベントが催される場にもなるだろう。春のオープンが待ち遠しい。

建築家 安部 良

architects atelier ryo abe
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷4-2-22-201
Tel: +81334074676 Fax: +8134074675
aberyo@aberyo.com www.aberyo.com

安部良プロフィール
1966年 広島県生まれ
1990年 早稲田大学理工学部建築学科卒業
1992年 早稲田大学大学院理工学研究所修士修了
1994年 一級建築士取得
1995年 AARA architects atelier ryo abe
一級建築士事務所安部良アトリエ設立

受賞歴
AR Award for Emerging Architecture 2010, 大賞
WAN Awards 21 for 21 2011, 大賞
World Architecture Festival 2011 World Culture Building of the Year, 大賞
Barbara Cappochin Biennial Internationa Prize 2011, Special Detail Prize 大賞
著書: 建築依存症/ARCHIHOLIC (ラトルズ刊)

